

学習指導要領改訂における中学校英語の評価の在り方の一考察

岡崎 伸一・鈴木 啓

A consideration on the evaluation of junior high school English in the revised course of study

Shinichi Okazaki and Hiromu Suzuki*

(Received September 30, 2021)

1. はじめに

2020年度から小学校において学習指導要領の改訂されたものが実施されている。そして、2021年4月から中学校現場においても同様に実施され始めた。この学習指導要領改訂については、それまでの4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）で4観点（コミュニケーションにおける関心・意欲・態度、外国語表現の能力、外国語理解の能力、言語や文化についての知識・理解）における評価から4技能5領域（「話す」が2領域へ分かれて、①「話すこと「やり取り」、②「話すこと「発表」となる。）の3観点（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）となっている。

筆者は2021年3月末まで東京都公立中学校に勤務していた。現場では校内研修等を通してこの改訂について学ぶ機会は何度かはあった。しかし、当時は移行前であったため、それまでの4観点や指導の仕方、評価方法、テスト問題作成等がどのようにシフトチェンジされるのかが不明瞭であることが多く感じられた。

2020年度から、学習指導要領改訂案を先行実施する研究校であった新潟市立五十嵐中学校に赴任していた共著者*から具体的なテスト問題やパフォーマンステスト等に関する情報を共有してもらうことで、どのようにシフトしていくべきかが徐々に明確になっていった。

しかし、現場では年が明けて年度末に向かう頃には次年度の準備も同時に進行していく。日々、多くの教員が時間外労働をする中では時間的な余裕は全くない。筆者は2020年度末に退職し、大学での職に就いたが学生を指導する上で学習指導要領の改訂された内容を理解することは必須であった。4月の終わりに東京都調布市英語部会から研修会講師の依頼を受けた。題目は新学習指導要領に関する評価に関することであった。この機会を通し、この改訂について知り得たことを中学校現場に落とし込むことで少しでも現場の先生方の助けになればと考えた。

2. 研修会前での検討

講師依頼を受けた研修会の前に、東京都調布市英語部会では研修会を実施していた。グループワークを行い、評価の実践例や疑問点等を出し合い、共有していた。それらは58点にも及んだ。

その中で最も多く挙げられたものは「主体的に学習に取り組む態度」の観点に関するもので、55%を占めていた。それだけ現場での悩みが多い、または試行錯誤しているということであろうと考えた。次に多かったのが「思考・判断・表現」の観点に関するもので31%、そして「知識・技能」の観点に関連するものが14%であった。

それぞれの観点（表1、表2、表3）にて多く挙げた共通する疑問は以下の通りであった。

筆者は、研修会にて提示する資料の検討を共著者と共に行った。その上で一つ一つの事柄についての回答

*新潟県立巻高等学校・教諭

表1 「主体的に学習に取り組む態度」の観点

<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートを活用している ・授業での取り組みを評価に入れたい ・コミュニケーション活動に取り組む態度

表2 「思考・判断・表現」の観点

<ul style="list-style-type: none"> ・定期テストのライティング問題について ・パフォーマンステストについて ・スピーチについて

を示すことにした。

たとえば、「教員がどういった意図で問題を出しているか、設定しているか」について、「知識・技能」になる問題と「思考・判断・表現」になる問題がある。

「思考・判断・表現」について、「新しい問題をわざわざ作るというより、分け方を変えるだけでいいのでは

はないか？」との質問には「この考えでは△である。Writing は作問しやすく、Reading は作りにくいに分かりやすい例を出すのであれば、焦点をおいた文法事項があり、一か所のリーディングポイントで読み取らせる問題が「知識・技能」の観点であり、焦点をおいた文法項目がなく、目的や場面・状況を設定し、複数箇所

のリーディングポイントで読み取らせる問題が「思考・判断・表現」の観点になる。知識は「正しさ」を測り、技能は「活用できるか」を測る。思考・判断・表現は「適切さ」を測ることになる。」というように回答を作成していった。

その説明の際に、下の図1の問題を例として提示した。この問題は、「ALTの自己紹介の後、ALTに英語で質問する」という場面・状況を設定している。指示文に「ALTの自己紹介に関連した内容で」とあるので、適切さを評価する問題であり、「思考・判断・表現」を測る問題と言える。たとえば、“What animal do you like?”という解答は、文法・語法のミスはないので、「正しさ」の観点では、正解である。しかし、ALTの自己紹介とは関係のない内容であるため、「適切さ」の観点では不正解である。「正しさ」よりも「適切さ」を優先して評価すべきであるため、この解答は無得点となる。“What food do you like?”という解答は、ALTの自己紹介と関連しているので、適切であり、ミスもないので満点解答となる。では、“When are you practice basketball?”という解答はどうか。「適切さ」の観点はクリアしている。「正確さ」の観点では、“do”を“are”とする文法エラーが見られる。この場合は、意味が通じているので減点なしとするか、あるいは、事前に授業で繰り返し取り上げたエラーであるならば、指導する目的で減点とするかは、指導者の裁量となる。

大切なことは、次の2点である。1点目は、起こりうるエラーを予め想定し、採点基準を作っておくことである。この問題は2文での記述であるため、評価基準は単純であるが、5文を超えるエッセイ等を書かせる場合は、事前にループリックを作成しておく必要があるだろう。2点目は、類似問題を授業で扱うことである。授業中に場面・状況や問題条件の設定を変えて、書く練習をする必要がある。そのように十分指導した結果、生徒の力が高まったかを評価するのが、本来あるべき指導と評価のサイクルである。また、それが今求められている「指導と評価の一体化」である。

一方、図2は、知識・技能を測る問題である。会話を読んで、空欄を埋める問題であるが、現在完了形の「have + 過去分詞」を理解しているかを問うことが明確である。このように、場面・状況が設定されておらず、特定の言語材料に焦点を当てている問題は知識・技能として扱われる。

以上のように、思考・判断・表現の問題と知識・技能の問題を比較すると、それぞれ

表3 「知識・技能」の観点

<ul style="list-style-type: none"> ・定期テストでの出題 ・小テストについて ・音読テストについて

11 英語の授業で、ジェイコブ先生が以下のように自己紹介をしました。あなたなら、その後ジェイコブ先生にどんな質問をしますか。ジェイコブ先生の自己紹介に関連のある内容で、2文書きなさい。

図1 研修の補助として使用した問題 (1)

れの観点が理解されやすいと考えた。

研修時間は90分程度であるが、回答の検討は3日ほど時間を取り合計で5時間はかかったであろう。

9 次の会話文を読んで、空欄に入る最も適切な語(句)を1つ選び、
記号を解答欄に書きなさい。

(1) A: Do you have a smartphone?
B: No, I don't. I have () it for a long time.
A: You can get it after you became a high school student.

ア want イ wants ウ wanted エ to want

図2 研修の補助として使用した問題(2)

3. 研修会にて

研修会当日は、東京とオンラインで遠隔にて実施した。90分の研修会であったために、回答を手短かに解説するように心がけた。

初めは新観点への変更点や要点を復習し、その後に事前に知らされていた疑問等への回答を示した。下の図3は筆者が提示した一画面である。筆者からの回答はオレンジ色で示し統一した。赤では色彩が強いため同系色の暖色系であるオレンジを選択した。


また、回答はスライドで8枚になったために、筆者からの回答は→(矢印)や○(丸)や△(三角)の記号を使い、できる限り簡素化した。

回答が多いために重複した箇所は削除等した。90分ほど時間がかかってしまったが、事前に得た疑問に関しては回答することができて、研修会を終えることができた。

研修会の中で、多くの先生方が「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法について疑問を持っていることが分かった。「主体的に学習に取り組む態度」は、①粘り強さと②自己調整の2点に分けられる。(図4参照)①粘り強さとは、例えば、ALTと話すために、基本的な質問文をスラスラ言えるように繰り返し音読練習をするような目標達成に向けた継続した努力を評価する。一方、②自己調整に関しては、自分の発話を仲間に聞いてもらって、発音の正しさを確認してもらったり、タブレットで録画して、アイコンタクトやリアクションが自然かを自己評価したりするなど、自分の学習の進捗度合いを振り返り、改善策を考える様子を評価する。

高橋 Groupからの疑問

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について



▼3観点での評価について

- 教員がどういった意図で問題を出しているか、設定しているか、で「知識・技能」になる問題と「思考・判断・表現」になる問題がある。「思考・判断・表現」について新しい問題をわざわざ作るというより、分け方を変えるだけでいいのではないか?→△、Writingは作りやすい、Readingは作りにくい(一か所→知技、複数箇所→思判表)、知「正しさ」技「活用できるか」、思判表「適切さ」
- 3観点のうち「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」はリンクさせて考える。具体的な方法を模索している。→○(ある先生は、、、)
- 「知識・技能」:「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」は1:2のようなイメージで評価する。→1:2?
- パフォーマンステストなどは、ループリックでゴールを明確に示している。→○
- 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を1:1:1で評価すると、「主体的に学習に取り組む態度」が異常に高くなってしまふ。? →○

図3 研修会で投影した一画面

ただし、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料では、「主体的に学習に取り組む態度」は「思考・判断・表現」と一体的に見取ると記述されている。つまり、粘り強さや自己調整を発揮した結果、パフォーマンステスト等で以前よりスキルの向上が見られた場合、両方の観点を評価するということである。

では、実際にどのように評価するのか。授業中の観察ももちろんだが、生徒全員の進歩を把握するために、振り返りシート(図5参照)を活用することが有効であると考えられる。全ての授業で振り返りを書くことは、生徒にとっても、それを点検する教師にとっても大きな負担となるので、パフォーマンステストを実施する単元に限定して、振り返りを行うと良い。

具体的には、単元の最初にパフォーマンステストの課題(例えば、ALTの先生と1分間会話をしよう)を

提示し、その目標を各自に設定させる。「ALTの先生と1分間会話をする中で、みんなが知らない情報を5つ以上聞き出す」など達成したかが明確な目標が望ましい。以降、第1時、第2時と質問文を習得する時間となるだろうが、その授業で習得した内容や、知りたいことなどを振り返りシートに書きためていく。第3時、第4時では、ALT役と生徒に分かれてロールプレイを行う。ここで、自分の進歩を振り返る時間を設け、進捗度合いを記述させる。(タブレットなどを使えと振り返りの助けになる。)いよいよ第5時でパフォーマンステストを行う。そして、第6時では、録画しておいたパフォーマンステストの映像を視聴し、第3時のロールプレイの時と比べて良くなったところや、まだ上手に伝えられない表現等を記述させる。ここで、良くなったところについては、どのような練習をしたから上達したのかを書かせると、評価材料として活用しやすいと考えられる。最後に、単元のはじめに立てた個人目標を達成できたかを自己評価させる。

以上のように、単元の最初、途中、最後の生徒の記述を重点的に見取り、単元を通して生徒が成長したかを評価することが望ましい。

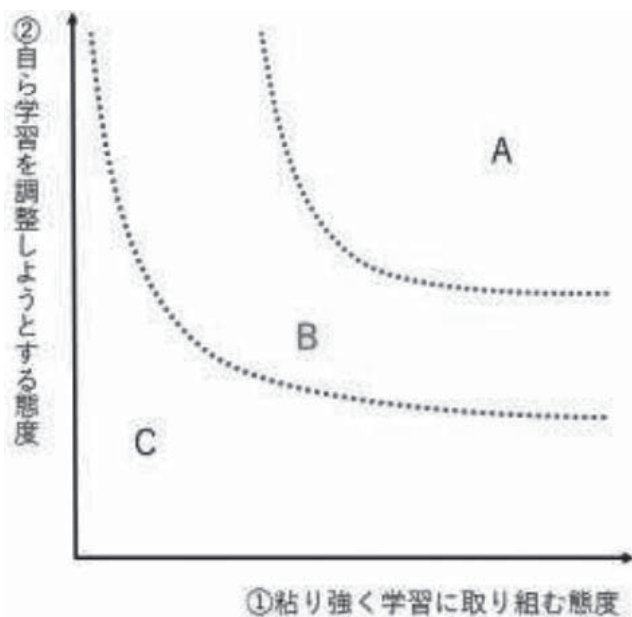


図4 主体的に学習に取り組む態度の評価のイメージ

Progress Card

1年 Lesson3

No. ___ Name _____

単元の目標：ジェイコブ先生と1分間英語で会話を続けることができる。

自分の目標

No.	Date	Today's Goal	Comment <small>できたこと、分かったこと、改善できたところ、 まだできないこと、質問、欲しかったところ</small>
1			
2			
3			
4			
5			

【パフォーマンステストの振り返り・単元で何ができるようになった?どこが成長した?】

図5 振り返りシート (Progress Card) の一例

4. 研修会后

一度限りの90分ほどの研修会ではあったが、参加された先生方の理解がどの程度進んだのかを Google forms によるアンケート調査を行った。その結果は以下の図6~9の通りであった。

回答数は13名と少なかったが、それでもある程度の傾向は読み取ることができた。たとえば、指導歴が10年以上のベテランの層が70%であるが(図6参照)、「主体的に学習に取り組む態度」に多くの先生方が疑問や不安を示していた(図7参照)。筆者も中学校現場にいた時と同じ感覚であった。「思考・判断・表現」では、疑問や不安を少々示し(図7参照)、疑問や不安がない項目(図8参照)も少々挙がっている。

そのことは、理解できている点もあれば、今一つ理解には至らぬ点もある不明瞭な感じなのであろう。そ

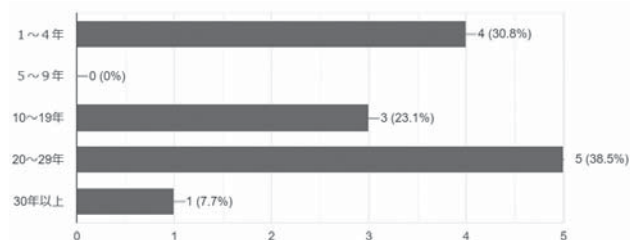


図6 アンケート回答教員の指導歴の構成

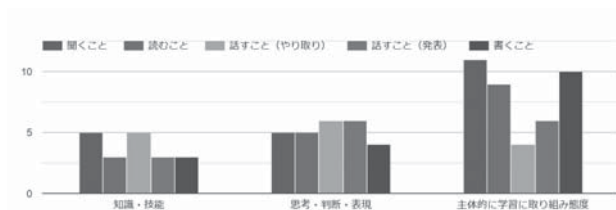


図7 研修前に疑問や不安があった3観点・5領域

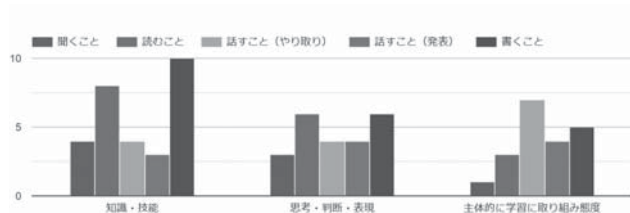


図8 研修前に疑問や不安がなかった3観点・5領域

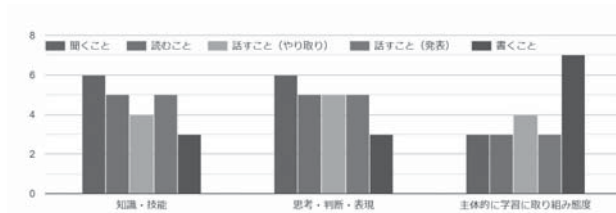


図9 研修後に疑問や不安が解消できた3観点・5領域

して、「知識・技能」の観点は、他の2観点よりも疑問は明らかになっていると感じているようだ(図7, 8参照)。5領域の中では、図7にあるように、不安を感じる領域として「書くこと」が2番目に多かったが、図9にあるように研修会後では疑問や不安が解消された項目として最も高かった。これは、書くことは「主体的に学習に取り組む態度」の観点と「思考・判断・表現」の観点を一体的に評価することができることが理解しやすいのであろう。また、焦点をおいた文法項目を設けずに、目的や場面・状況を設定し、「正しさ」ではなく「適切さ」を測ることが理解されたのであろう。

図9では、「知識・技能」では読むことと話すこと(発表)が微増している。これは焦点をおいた文法項目が該当する文章を読み取ることや発表において「技能」として文法項目を活用できるかどうかを評価しやすいためであろう。

研修会終了後の先生方からは、以下の表4のような感想が見られた。

表4 研修会後の教員からの感想(抜粋)

- ・「主体的に取り組む態度」をどんな項目で、どのような基準で評価していけばよいのか、なかなかイメージができていませんでした。岡崎先生のお話を聞いたり、他校の先生方と意見交換できて、なんとなくイメージができてよかったです。
- ・短時間に大変複雑な内容を、わかりやすくまとめてくださり、ありがとうございました。
- ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価についてはまだまだ理解が足りないと感じました。指導教諭という立場上説明を求められることも多いのでがんばります。また色々と教えてください。
- ・主体的に学習に取り組む態度に対する評価の方法について、理解を深めることができました。普段の様子から見とっていくということは、なかなか難しいと思うので頑張っていきたいと思います。発表等で見ていくことは可能だと思ったので、取り入れていきます。
- ・とても参考になりました。しかし、研修動画の内容を実際の評価評定に活かせていないかもしれません。
- ・岡崎先生の研修や授業は以前何度か参加させていただく機会があり、毎回楽しく勉強させていただきました。楽しい岡崎先生のご講演だけでなく、他の先生方とも情報交換をすることができ、3観点での成績を深く考える機会となり、有意義な時間になりました。ありがとうございました。
- ・やはり悩みはどの学校でも一緒だということがわかり、少し安心しました。ありがとうございました。
- ・主体性評価について、長期的に議論する必要があると感じた。

・今まで高等学校でしか勤務経験がなく、中学校は初めての勤務となります。新規採用で4月から勤務しておりますが、観点別評価をした経験がなく、困っていたところでした。しかし、今回の研修で氷が解けたように、悩みが解けました。特に主体的学習の態度についての評価方法については、岡崎先生のアドバイスのおかげで気持ち楽になりました。自信をもって評価できると実感できました。さらに、岡崎先生も東京都の教員としてご勤務されていた経験があったので共感できた部分がありました。非常にためになりました。

短時間での研修会ではあったが、少しでも先生方の疑問や不安が解消されたのであれば、嬉しい限りであった。

5 1学期が終了して

6月の研修会が終わり、中学校現場では定期テスト作成や評定算出の時期となり、それらが終了してから夏季休業に入ることが多い。東京都調布市も同様であった。そのため、研修会で新観点の評価について学んだものの、実際の運用面ではどう生かされたのか、またどのような課題が生じているのかを調査した。その結果として以下の表5の記述が見られた。

表5 1学期が終わっての新観点について

- ・1学期の評定をつけながら、やはり「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しいと感じました。基準はこれでよかったのか？という疑問、つけ方を2学期以降見直す必要があるな、と感じました。
- ・新たにではないのですが・・・「理解していてもできないこと」はあるはずなのに、「知識・技能」という形で観点を一つにまとめてしまってもよいものなのか・・・と腑に落ちず・・・
- ・語いや文法を問う問題の適正な出題の仕方。
- ・4観点から3観点になって、3年生の評価評定で、変化のあった生徒もいました。3年生については大きく変更ないようにとの指示もあり、そのようにしました。
- ・「主体的に学習に取り組む態度」について、パフォーマンステストでは基準を設定することで、迷わず点数をつけることができるのですが、他にどのような課題でどのような採点方法で成績を付けることができるかもっと知りたいです。また、どうしてもワーク提出や課題プリントの提出をもって主体性の点数をつけたくなくなってしまい悩みの種です。「主体的に学習に取り組む態度」についてどのような課題をどう採点するか、正しい成績のつけ方の例を具体的にもっと知りたいです。
- ・提出物の内容の評価。帰国子女の生徒で英語がすでに話せる生徒に提出させることが心苦しいし、英語以前に理解力に課題のある生徒はノートをとる技術がそもそもない。そもそもこういった課題はなくても良いのでは（勉強の仕方を生徒に選択させる機会を増やしたほうが良いのでは）と感じている。校内の課題で恐縮ですが共有です。
- ・観点の評価の仕方が、知識・技能 A 思考・判断・表現 A 主体的な学習の態度 C といったバランスの良くない評価方法について管理職に指導されたのが不安でした。このような評価方法も生徒によっては出てくるので、人工的な評価方法をすることに不安を感じました。また、今年度初めて3観点で評価するので、評価材料がすくなくったことに不安を感じました。
- ・英作文やスピーキングテストなどを評価する際に使用している自作のルーブリックの表が適切どうか不安です。

特に下線部（筆者が下線を付記）では、評価はしてみたものの新たな疑問であったり、さらに他の評価方法を知りたいという研修が生きていると思われる点が見られた。しかし、昨年度までの評価の仕方に縛られている様子も読み取れる。たとえば、提出物に関する評価である。新観点では提出物の有無での評価はしないことになっている。たとえば、ワーク提出などのやったかどうかで評価をするようなことはないのである。提出物と言えども表現した作品などに対して規準（基準）を設け、提出物の「中身」を評価することは可能なのである。長年の習慣からなのか、評価をしたくなるのであろうが今年度からはやめることが教師側に求められる。

ルーブリック評価の適切さやテスト問題の適切な出題の仕方など不安は拭い切れないであろうが、生徒や

保護者への説明責任を果たし、共通理解した上で評価をし、次学期や次年度への修正案として生かしていくことが実用的であると考える。

20年ほど前、絶対評価が導入された時も評価方法やテスト作成について、現場の混乱は大変なものであった。そして、今回の学習指導要領の改訂である。今までの知識や経験を生かし、徐々にシフトしていくことが無難であると同時に、自治体の研究会や研修会にて理解を深め、同学年や同教科で助け合いながら、疑問点は一つ一つ解消していくことが現実的である。

5. おわりに

つい最近まで中学校現場で教鞭をとっていた筆者としては、現場での大変さは理解している。そのため、研修会の講師として少しでも役に立てる研修にしたいとの思いが強かった。現在は教員養成に携わっているが、大学教員としての立場から日々現場で奮闘している先生方の支援に貢献できれば幸いである。今後も学校現場の視点を忘れずに大学での研究・教育に注力していく決意である。

参考文献

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター. 2020. 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料. 東京: 東洋館.
- 2) 瀧沢広人. 2020. 小学校外国語活動&外国語の新学習評価ハンドブック. 東京: 明治図書.
- 3) 長野県教育委員会. 「中学校英語「指導と評価の一体化」テスト改善ハンドブック.
URL: <https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/kyoshokuin/shiryo/documents/tyuugakkotestkaizenhandbok.pdf>
- 4) 本多敏幸. 2020. 中学校外国語新3観点の学習評価完全ガイドブック. 東京: 明治図書.
- 5) 本多敏幸. 2021. ELEC 同友会オンラインセミナー資料.